茨城県稲敷郡江戸崎町

姫宮古墳群１・２号墳
水神峯古墳

２０００

江戸崎町教育委員会

発刊に寄せて

古い歴史と伝統を持つ江戸崎町には、数多くの遺跡が残されています。平成10・11年に行われた町内埋蔵文化財包蔵地分布調査により、遺跡数が従来の３倍に相当する160ケ所に及ぶことが確認されました。今後、それらの遺跡が発掘調査され、古代の江戸崎町の様子が、次々に明らかになり町の歴史や文化研究の資料や模拠になることを想定すると、極めて貴重な価値を持つことになります。

その価値ある江戸崎町の遺跡の一つに、今回姫宮古墳群（１・２号墳）、水神峯古墳の出土遺物が加えられることになりました。本書は、町道拡幅工事に伴い、江戸崎町建設課の委託を受け、教育委員会として、山武考古学研究所に発掘及び整理などを依頼し実施された調査の報告書です。

これを機会に、文化財に対する認識が益々深まり、これらを通じて郷土を愛する心が培われるように希望するものです。最後に、本書をまとめるまでに、多くの方々のご協力とご支援をいただきました、それらの方々に衷心からお礼を申し上げて、発刊の言葉といたします。

平成12年10月

江戸崎町教育委員会
教育長　朝比奈克己

例　　言

1．本書は、町道の拡幅工事に伴い事前調査が行われた、茨城県稲敷郡江戸崎町に所在する姫宮古墳群１・２号墳の発掘調査報告書である。
2．調査は、江戸崎町教育委員会の指導のもと山武考古学研究所が実施した。
3．遺跡の所在地・調査面積・調査期間・担当者は下記の通りである。
　所 在 地　江戸崎町大字佐倉字迎坪1801－2外
　調査面積　80㎡
　調査期間　平成12年７月12日～８月４日
　担 当 者　間宮正光（山武考古学研究所）
4．本書には、町建設課の協力を得て、昭和48年に調査が行われた水神峯古墳の資料を掲載した。
5．本書の編集及び整理調査は、河村公子の協力を得て間宮が担当した。
6．本書の執筆は、Ⅰ・調査報告に至る経緯が平田満男（江戸崎町教育委員会）、他が間宮である。
7．調査に際しては、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。（敬称略、順不同）
　宮本雄二　廣澤　登　折原洋一　佐倉地区の皆様　茨城県教育委員会　江戸崎町建設課
　江戸崎町文化財保護審議会委員

目　　次

発刊に寄せて
例言
目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　歴史的環境
　江戸崎町の遺跡……1
　姫宮古墳群の概要……5
Ⅲ　調査の方法と経過
　調査の方法……7
　調査の経過……7
Ⅳ　検出された遺構と遺物……9
Ⅴ　調査の成果……10
水神峯古墳
　調査報告に至る経緯……11
　遺跡の立地……11
　出土遺物……12
　おわりに……16
抄録

調査参加者（順不同）
　宮本武美　沼崎懋治　沢辺　勇　高橋勝雄
　武藤　進　戸嶋明生

Ⅰ　調査に至る経緯

平成12年３月６日に江戸崎町建設課から町道拡幅工事計画に伴う埋蔵文化財の取り扱いの照会があり、３月７日に建設課職員による計画予定地での説明を受け、周知の遺跡である姫宮古墳群の１・２号墳の墳丘にかかる為、３月19日に町文化財保護審議会を開き、計画予定地の踏査及び隣接する姫宮古墳群の３～８号墳との関連性等について検討され、町道整備が生活環境の向上の為には必要なものであることの了解と事前の調査の必要性が指摘された。その旨建設課に回答をし、協議が行われ、事前の発掘調査を実施して記録保存することに決定した。

次いで、３月末に竹木等の伐採が建設課の手で実施され、４月に山武考古学研究所に調査日程の調整を依頼するなど調査の準備が進められた。更に、７月までに調査計画もでき、茨城県教育庁文化課文化財担当の指導助言を受け、山武考古学研究所への調査委託契約も整い、茨城県への埋蔵文化財発掘調査の届出を経て、７月12日から８月４日までの予定で本発掘調査が開始されたのである。

Ⅱ　歴史的環境

江戸崎町の遺跡

江戸崎町は、茨城県南部、稲敷郡のほぼ中央部に位置し、町域の大部分を稲敷台地が占める。この台地は縄文期の海進海退と小河川により形造られた標高20m前後の安定した台地で、原始からの遺跡が数多く確認されている。第１図は、平成10・11年度に実施された町内の埋蔵文化財包蔵地分布調査の成果を示したもので、現在160箇所の遺跡が認められる。町域における遺跡の分布状況を概観すると、南部及び東部の谷津に挟まれた樹枝状に延びる比較的狭い台地上に遺跡は確認され、西部にあたる月出里地区などの広く安定した台地上には少ない状況にある。

当町には多くの貝塚が点在し、高田地区の駒塚・藩ケ山、佐倉地区の南平・山中・小松川の各貝塚や、明神貝塚、村田貝塚、更に椎塚貝塚など、縄文遺跡の宝庫であることが知られる。特に椎塚貝塚は、小野川を臨んだ台地の斜面にあり、明治26年の東京大学の調査以来、縄文後期から晩期に属する貴重な遺物が出土している。なかでも国の重要文化財に指定されている土瓶形をした鉢を持つ注口土器や、骨器の用途を明示することとなった、鯛の頭骨に打ち込まれたまま発見されたヤスなどは、縄文文化を考える上で重要な資料である。弥生時代では、昭和59年に行われた烏の台古墳群の調査において、７号墳の墳丘下から検出された後期住居跡の発見が初見で、これ以来、大日山古墳群、思川遺跡、秋平遺跡の発掘調査において確認され、分布調査の成果を合わせ見ると弥生時代の遺跡は、餃ケ浦や小野川を臨む台地上に展開するようである。古墳については、当時の権力基盤を物語るものであろうか、餃ケ浦や小野川などの水系を臨む台地縁辺部に立地する傾向を示し、第１表で記載した通り、全体で15古墳群、80基が確認される。これらは主に円墳で構成されているが、前方後円墳も11基を数える。律令期には、下君山の台地上に郡衙想定地があり、瓦が散布し塔心礎が遺存するなど郡寺の存在が窺われる。周辺の台地上には墨書土器を含む多量の遺物が散布しており、それらの量から察すると、大規模集落の存在も指摘される。また、従来遺跡の埋蔵が確認されていなかった台地麓部の微高地上にも遺物の散布が認められ、遺跡の埋蔵が台地上にとどまることなく広がることを示している。中世においては、古渡地区の砂州上から陶器片が表採され、この地区には史料により頓朝河岸などの存在が知られていることから、それらと直接的につながるか今後注目されるところである。

第１図　江戸崎町の遺跡（国土地理院作製2.5万分の１『江戸崎』を5万分の1に縮小）

第１表　江戸崎町の古墳一覧表

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	種　類	備　　考
００２	見晴塚古墳	江戸崎字原乙602外	包蔵地・古墳	複合遺跡　円墳１基（直径20m）
００３	豆塚御遺跡	江戸崎字豆塚師乙426外	包蔵地・古墳	複合遺跡　円墳１基（直径20m）
００７	亀ヶ谷城古墳	羽賀字新畑1352	古墳	円墳１基（直径30m）
００８	荒地古墳	羽賀字荒地1268－１	古墳	円墳１基（直径15m）
００９	木納場古墳群	羽賀字木納場1616	古墳群	円墳３基（直径15・21・18m）
０１０	大塚古墳	羽賀字大塚1881外	古墳	円墳１基（直径20m）湮滅
０１１	権現塚古墳群	下君山字羽黒1726外	包蔵地・古墳群	複合遺跡　円墳３基（直径17・10・14m）
０１３	浅間山古墳群	沼田字東前1106－１	古墳群	円墳２基（直径16・12m）湮滅
０１５	自鐵前遺跡	沼田字自鐵前2361－1外	包蔵地・古墳	複合遺跡　円墳１基（直径12m）湮滅
０１６	大大屋敷遺跡	沼田字大大屋敷1856－２	包蔵地・古墳	複合遺跡　円墳１基（直径10m）
０１９	天神山古墳	佐倉字山中平1621	古墳	円墳１基（直径21m）
０２１	殿屋敷遺跡	佐倉字殿屋敷1509－2外	古墳・城館跡	複合遺跡　前方後円墳１基（全長26m）
０２２	館の台古墳群	佐倉字館の台1925－1外	集落・古墳群・城館跡	複合遺跡　前方後円墳４基（全長30・16m）・円墳２基（直径24・30m）・松円形堆１基（長辺18m）・方墳１基（長辺20m）1986報告書刊町教委　1999発掘調査　1・８号墳を除き調査湮滅
０２３	佐倉原古墳群	佐倉字佐倉原3045－1外	包蔵地・古墳群	複合遺跡　円墳６基（直径15・12・6・13m）1・5号墳湮滅
０２５	大塚山古墳	駒塚字大塚420	古墳・塚	前方後円墳１基（全長23m）
０２６	隠里の塚古墳	椎塚字台1747－１	古墳	円墳１基（直径15m）
０３７	中峰遺跡	村田字中峰甲3901外	包蔵地・古墳群・城館	複合遺跡　円墳２基（直径16m）１号墳の岩十は割平を受ける
０３８	大日古墳	羽賀字大日1411－２	古墳	円墳１基　削平著しい
０４０	中城古墳	羽賀字中城1568	古墳	円墳１基（直径13m）
０４１	大日峯古墳	松山字大日峯2772	古墳	方墳１基（長辺24m）近世の塚の可能性有
０４２	山王古墳	下君山字山王3305－１	古墳	円墳１基（直径９m）
０４３	大塚古墳	上君山字人塚2409	古墳	方墳１基（長辺24m）近世の塚の可能性有
０４４	沼口古墳群	上君山字沼口3492外	古墳群	前方後円墳１基（全長75m）・円墳２基（直径３m）３号墳滅
０４５	栗山遺跡	小羽賀字栗山581－4外	包蔵地・古墳群	複合遺跡　円墳？2基　封土は割平を受ける　石棺埋葬有
０４６	土戸古墳	時崎字土戸255－１	古墳・集落	複合遺跡　円墳１基　1991年調査湮滅
０４７	東前古墳群	時崎字東前619外	古墳群	前方後円墳１基（全長53m）・円墳１基（直径23m）
０４８	辺田台古墳	瀬ヶ山字辺田台257－２	古墳	円墳？１基（長辺10m）
０４９	長塚古墳	佐倉字長塚326	古墳	円墳１基（長辺10m）
０５０	館宮古墳群	佐倉字辺坪1801－2外	古墳群	前方後円墳２基・円墳６基（詳細はＰ５に記載）
０５２	桑山古墳群	桑山字上ノ台306－2外	古墳群	円墳４基（直径12・11・29・６m）
０５４	日向古墳	鳩崎字日向906	古墳	円墳１基（直径10m）
０６４	原辺遺跡	佐倉字原辺2467－3外	包蔵地・古墳	円墳？１基（長辺10m）
０６７	水神峯古墳	佐倉字水神峯2094－１	古墳	不明　1973年調査湮滅
０７０	外浦古墳	江戸崎字外浦458－35	古墳	前方後円墳？１基（全長21.5m）佐倉原古墳群７号墳を独立
０７１	新山西遺跡	江戸崎字新山甲841外	包蔵地・古墳？	複合遺跡　円墳？１基（長辺５m）
０９６	塚本遺跡	沼田字塚本1040－１外	包蔵地・古墳群	複合遺跡　円墳２基（直径15・19m）
０９９	亀台古墳群	沼田字亀台1478－1外	古墳群	円墳２基（長辺５・７m）
１１２	山後古墳	村田字山後301	古墳	円墳１基（直径16m）
１１５	荒地平古墳	羽賀字荒地平1321	古墳	円墳１基（直径15m）
１３５	真福寺遺跡	高田字並木1431－1外	寺院跡・古墳？	方墳？１基（長辺18m）塚の可能性大
１３６	高田人神古墳	高田字高田大神1348－１	古墳	不明　湮滅
１４０	青宿古墳	高田字青宿689	古墳	円墳１基（直径20m）
１５９	台坪古墳群	桑山字台坪337	古墳群	前方後円墳１基（全長31m）・円墳１基（直径17.5m）
１６０	清水古墳群	桑山字白鍬谷97外	包蔵地・古墳群	東町にまたがり合計10基から成る　江戸崎町分円墳２基（直径13・125m）、東町分墳方後円墳１基（全長30m）・円墳６基（直径21・9・25・15・10・20m）・不明１基

※本表は、埋蔵文化財包蔵地分布調査の成果の内古墳のみを抜粋したものである。彩墨及び詳細説については、発掘調査を行っているものを除いて現況を記載した。

第２図　姫宮古墳群の位置（明治14年測量迅速図１：40,000）

第３図　姫宮古墳群分布図（１：5,000）

姫宮古墳群遠景（南より）

１・２号墳　全景（南より）

３号墳　全景（南西より）

４号墳　全景（南西より）

姫宮古墳群の概要

姫宮古墳群は、江戸崎町北部にあたる佐倉地区に位置する周知の遺跡である。この古墳群は、霞ケ浦や小野川からはやや奥まった台地上に立地しており、第２図や第３図のスクリントーンで示したように、樹枝状に入り込む谷津により囲まれている。現況は前方後円墳２基、円墳６基の計８基から成る古墳群で、北西方向には谷津を挟んで天神山古墳が、南西約700mには６基の古墳から構成される佐倉原古墳群が存在する。

姫宮古墳群個別の規模については、下表にまとめているので御覧し、ここでは分布状況について概観する。姫宮古墳群を全体的に見ると、前方後円墳である８号墳と今回調査が行われた円墳の１・２号墳が、南西から入る谷津と北東から入る谷津に面した縁辺部に展開し、更に、地山成形による構築の可能性を窺わせる前方後円墳の７号墳と、円墳である３・４号墳が、地形図からは読み取りずらいものの、北の谷津に面した縁辺部に立地している状況にある。前方後円墳２基の軸線はそれぞれほぼ同一方向を示しているが、古墳群内においては１・２・８号墳と３・４・７号墳の２群に大別できる。

なお、５・６号墳については、竹林の中に遺存し、円墳と捉えられているものの、形状も小さく近接していることから、他の古墳とは築造の時期やその要因などに相違があるのかもしれない。

第２表　姫宮古墳群一覧表

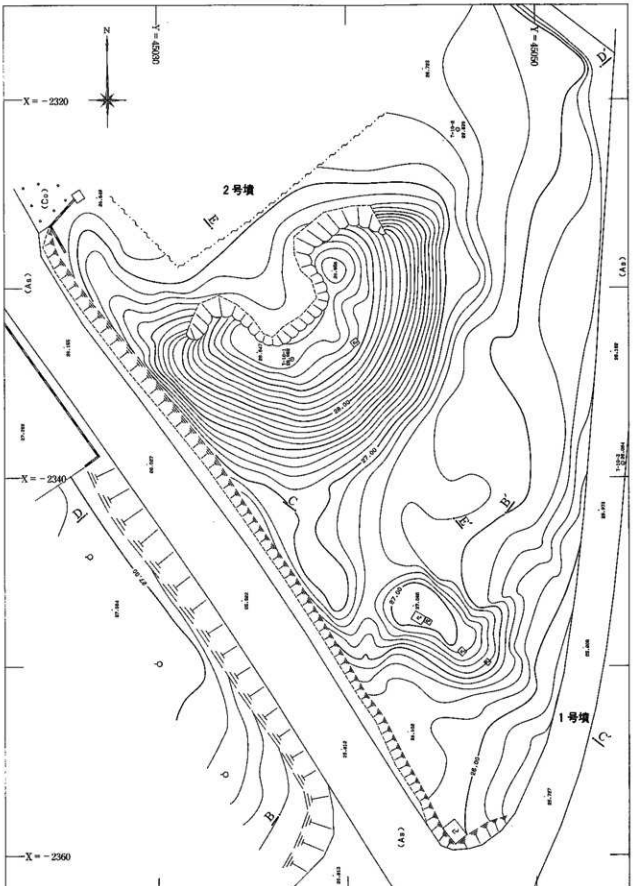
古　墳	１号墳	２号墳	３号墳	４号墳	５号墳	６号墳	７号墳	８号墳
形　態	円　墳	円　墳	円　墳	円　墳	円　墳	円　墳	前方後円墳	前方後円墳
規　模	長辺　8.5m 高さ　0.9m	長辺　20m 高さ　2.4m	直径　17m 高さ　2.7m	直径　10m 高さ　1.6m	直径　6.5m 高さ　0.8m	直径　5.0m 高さ　0.8m	全長　30m 高さ　1.7m	全長　32m 高さ　2.5m

５号墳　全景（南東より）

６号墳　全景（北より）

７号墳　全景（南より）

８号墳　全景（西より）



第4図　1・2号墳　墳丘測量図（1：200）

Ⅲ　調査の方法と経過

調査の方法

調査は、町道の拡幅工事に伴い実施されたもので、調査区の幅は２m、長さは約40mと細長く、姫宮古墳群１・２号墳の裾を南北に貫いている。従って調査は、墳丘の一部を対象とすることから、10cm毎の等高線による墳丘測量を実施し、併せて公共座標に基づいて座標杭打ちと水準点を設置した。この後、重機を用いて表土の除去に取りかかるが、調査区の幅は狭く、更に現道は地山を掘り下げて造られているなど、従来の遺構確認面での調査は不可能であった。このことから調査では、ソフトローム層まで下げて安全対策を施した後、主に調査区の東面、墳丘側の断面を利用して遺構を把握した。遺構の掘り込みが確認されたものについては、土層観察用のベルトを設定し、慎重に掘り下げ、随時写真と図面により記録を取った。更に、地権者である宮本雄二氏の協力を得て、ゴミ穴となっていた２号墳中央部を清掃し、上層断面図の作成と写真を撮影した。

遺構実測は、墳丘測量図・調査区全体図を1/100 で、遺構平面図及び土層断面図を1/20で作図し、写真撮影は、35mmモノクロフィルムとポジフィルム、６×７版モノクロフィルムを用いて調査の過程を記録した。

また、調査の最終段階で、町建設課の協力を得て埋め戻しを行い、再度安全対策を確認し現場での発掘調査を終了する。

整理調査は、発掘調査により得られた資料・遺物を対象にして実施した。遺物は、細片に至るまで全て水洗いを行い、インクジェットプリンター小型高速自動注記システムを使用し、可能な限り注記に努めた。注記については、下記の略号を用いている。

姫宮古墳群１・２号墳……ＨＩＭＥ１・２　　１号墳……１ＴＢ　　周溝……周

例）姫宮古墳群１・２号墳　表採遺物……ＨＩＭＥ１・２

姫宮古墳群１・２号墳　１号墳周溝内出土遺物……ＨＩＭＥ１・２－１ＴＢ－周

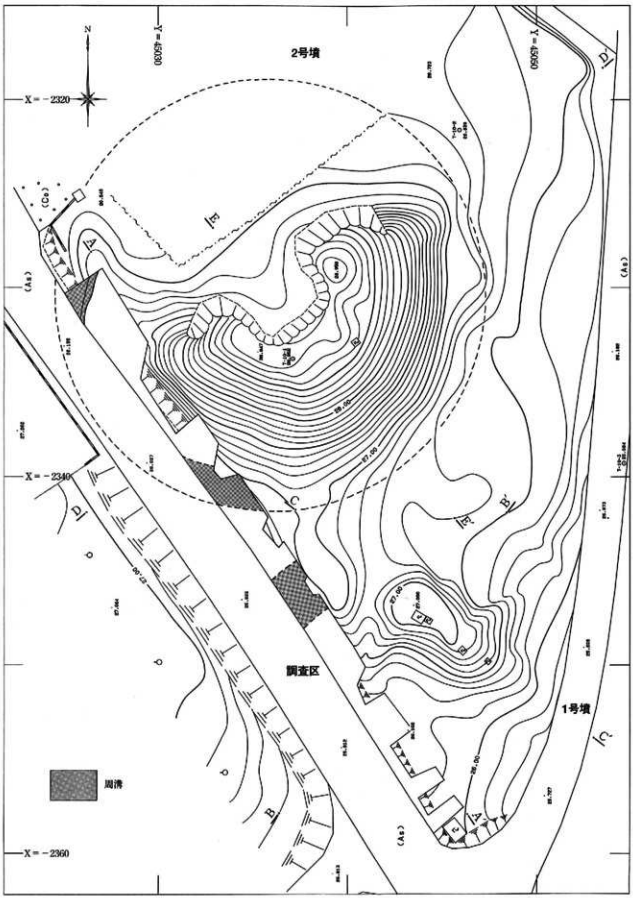
遺物の写真撮影は、35mmモノクロフィルムと４×５版モノクロフィルム・ポシフィルムを用いた。

なお、調査により得られた資料は、本書刊行後、江戸崎町教育委員会において保管している。

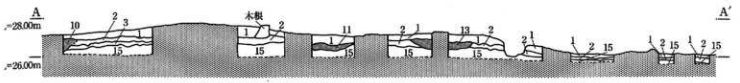
調査の経過

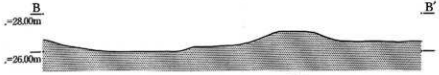
発掘調査は、平成12年７月12日～８月４日までの間実施され、その後水神峯古墳の出土遺物と併せて約１ケ月で整理調査及び本書の作成を行った。以下は現場調査経過の概略である。

７月12日、調査を開始し、墳丘測量を行う。17日、表土除去に取りかかるが、木根が多く遺構の確認が不可能である為断面観察により遺構の把握に努める。これにより予想された位置よりも高い地点で地山が検出されている。18日、精査の結果、２号墳の北側部分で周溝と見られる掘り込みを確認する。また、２号墳の土層断面写真を撮影し、実測に着手する。19日、１号墳においても周溝が認められ、１号墳は円墳の可能性が高いこと、更に２号墳は円墳であることが判明する。21日、１・２号墳土層断面及び周溝検出状況の写真を撮影する。24日、２号墳中央部の清掃に着手する。25日、２号墳中央部のゴミ穴の清掃を行ったところ、ゴミ穴となる以前には構築物が存在していたようで基礎が確認される。27日、２号墳周溝平面図及び調査区全体図の作成と、２号墳中央部土層断面の写真撮影を行う。28日、調査区全体の清掃に取りかかり、調査終了写真を撮影する。また、遺跡周辺の写真も併せて記録する。31日、町建設課立会のもと町教育委員会より終了確認を受け、２号墳中央部の埋め戻しに取りかかる。８月１日、２号墳中央部の埋め戻しを完了する。４日、調査区の部分的な埋め戻しを終え、現場における発掘調査を無事終了する。

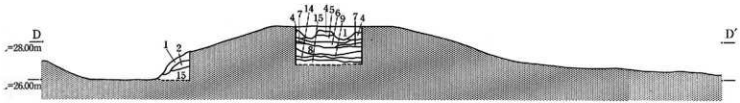


第５図　調査区全体図（１：200）





1号墳

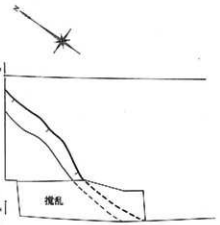


2号墳

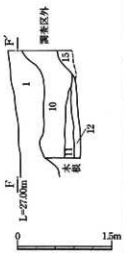
0 5m
(1：200)

土層説明

1 暗黄色土（表土）	木根痕の侵入著しい。しまり粘性なし。
2 暗黄色土	ローム粒まばらに含む。木根痕の侵入著しく、幼稚との分層は木根の影響により明確ではない。しまり粘性なし。
3 黄 色 土	ローム粒・ロームブロック0.1～5cm程まばらに含む。しまり有粘性弱。
4 黄 色 土	ローム粒・ロームブロック0.1cm程まばらに含む。木根痕の侵入著しい。しまり粘性弱。
5 黒黄色土	ローム粒・ロームブロック0.1～5cm程まばらに含む。木根痕の侵入著しい。しまり有粘性弱。
6 黄 色 土	ローム粒・ロームブロック0.1cm程まばらに含み、黒色土ブロック少量含む。しまり有粘性弱。
7 黒黄色土	ローム粒・ロームブロック0.1～5cm程まばらに含む。しまり有粘性弱。
8 黄 色 土	ローム粒・ロームブロック0.1cm程まばらに含む。しまり有粘性弱。
9 黄 色 土	ローム粒・ロームブロック0.1～3cm程まばらに含み、上層に母材の黒色土が幽分的に浸透する。しまり有粘性弱。
10褐黄色土（2号墳周溝）	ローム粒まばらに含み、木根痕の侵入著しく、2層との分層は明確ではない。しまり粘性なし。
11黒黄色土（2号墳周溝）	ローム粒まばらに含み、木根痕の侵入著しい。しまり有粘性弱。
12褐黄色土	ローム粒まばらに含み、木根痕の侵入著しい。しまり有粘性弱。
13褐黄色土（2号墳周溝）	ローム粒まばらに含み、木根痕の侵入著しい。2層より若干色調は暗い。しまり有粘性弱。
14黒黄色土（旧表土？）	ローム粒まばらに含む。しまり有粘性弱。
15黄 色 土（ソフトローム）	上層には木根痕の影響を受ける。しまり粘性有。



2号墳周溝



0 1.5m
(1：60)

第6図　1・2号墳　土層断面図

1号墳　調査前現況（南より）

2号墳　調査前現況（南より）

調査区　調査前現況（南西より）

調査区全景（南西より）

2号墳　北側周溝検出状況（南東より）

1号墳　周溝土層断面（南西より）

2号墳　南側周溝土層断面（南西より）

2号墳　北側周溝土層断面（南東より）

2号墳　北側周溝土層断面（南西より）

2号墳　墳丘中央部土層断面（西より）

Ⅳ　検出された遺構と遺物

今回の調査は、周知の遺跡である姫宮古墳群１・２号墳の一部に対して実施されたもので、墳丘の西側、特に裾部分を対象としている。調査区内は細長く、トレンチ調査といった様相であり、墳丘から現道へかけては急激に傾斜し、樹木及び竹が生えていた。調査は、前述した方法を用いて臨み、この結果、第６図の断面図のように、現表上下約30㎝で遺構確認面を、更に50㎝程下でローム層を検出している。このことから現道がローム層を掘削して作道され、いわゆる切り通し状となっていることが明らかとなった。また、調査前においては、１・２号墳は、それぞれ独立した円墳２基と捉えられてはいたものの、地形状況から前方後円墳の崩れた状態を示すものの、あるいは、２号墳は円墳で１号墳は近世などにおいて信仰された塚ではないかとの見方もあったが、今回の調査により以下の所見を得ている。

遺物は、大多数が表採であり、縄文土器片を主体として古代の土師器・須恵器片が僅かに出土している。

遺構

１号墳　　２号墳の南東側に近接し、現況で長辺8.5m、高さ0.9mを計測する。墳丘は辛うじて遺存し、如意輪観音・十三夜十九夜合併塔（享保十一年,1726）、如意輪観音・十九夜塔（寛保二年,1742）、六十六部回国塔（宝暦二年,1752）、道祖神（文政三年,1820）、稲荷大明神（天保五年,1834）の石塔が祀られている。調査範囲内においては墳丘の盛り土は確認されず、２号墳に接する北東側で幅3.3m、深さ0.55m、底部はやや平坦で断面形皿状の周溝が検出された。反対側にあたる南東部分を調査範囲際まで掘り下げたが続く周溝は発見されていない。形態については、周溝の検出状況から考えると、円墳の可能性が高いものと判断される。規模は、現状の高まりが墳丘の残存を示すもので、北側部分が墳丘の裾であると仮定し、周溝の検出状況を加味して推定すると、周溝部分を含めて直径23～25m前後となる。周溝部分については、２号墳と極めて近接するものの重複はしないであろう。古墳に伴う遺物は出土していない。

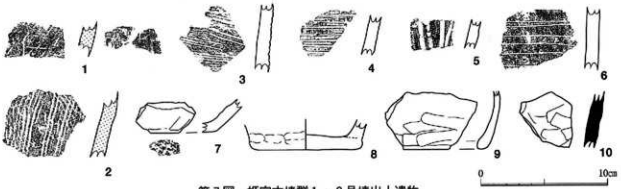
２号墳　　現況で長辺20m、高さ2.4mを計測する。墳丘の北西部分は宅地の為削平を受け、西側部分は町道により削り取られ、遺存状態は全体で1/2程である。形態については、後述する周溝の検出状況から円墳であることが判明している。調査範囲内における墳丘の盛り土は僅かで、中央部のゴミ穴の断面により構築状況の一端を窺うことができる。それによると、封土は、旧表土上に含有物が異なる褐色土と黒褐色土を、現状で1.6m程五層に積み上げていることが判る。周溝は、北西部分で一部が検出され、更に南部分では断面観察によりその存在が確認される。周溝の規模については、幅２m前後、深さ0.45m、北西部分で0.77mを計測し、形状は底部がやや平坦な皿状である。検出状況をもとに古墳全体の規模を推定したのが、第５図の破線で、周溝を含めて直径23m程の数値が得られる。古墳に伴う遺物は出土していない。

遺物

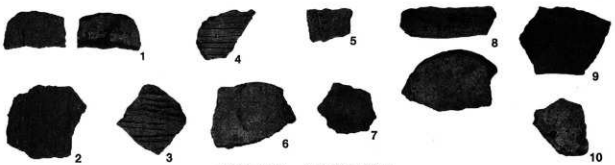
今回の調査により得られた遺物は、いずれも墳丘から表採されたもので、縄文土器を主体に全体で30点となっている。本項では、この内比較的遺存状態が良い資料を以下に提示する。

１～８は、縄文土器で、９は古墳時代後期、10は奈良・平安時代に属する遺物である。

１・２は、条痕文系の土器で、１は表裏両面に貝殻条痕文が確認され、それぞれ胎土に繊維を含んでいる。３～６は、沈線文系の土器である。４・５の内面には磨きが施され、胎土はいずれも石英・白色粒を含む。７・８は、底部片で、７には網代痕が認められ、下端に施状工具による削りが見られる。８は、やや小ぶりな平底で、復元による底径は９㎝である。９は、土師器の甕片で単孔と見られ、下端に横位の施削りが施される。10は、須恵器の甕の下端片で、外面に雑な施削りを行う。胎土は８・９共に石英・白色粒を含む。



第７図　姫宮古墳群１・２号墳出土遺物



姫宮古墳群１・２号墳出土遺物

Ⅴ　調査の成果

姫宮古墳群１・２号墳は、今回の調査において、それぞれ別個の古墳であることが明らかとなっている。形態については、２号墳は周溝部を含み直径23m前後の規模を有する円墳であると判断され、１号墳は、あくまでも推測の域は脱しないが、ほぼ同規模かそれ以上の円墳である可能性が高い。

更に、調査区が南北に細長くトレンチ状であることも幸いしてか、断面観察からは、北東から南西へかけ入る谷津に面した台地縁辺部に築造されていることが明確となっている。

１号墳については、その大部分が削平を受けており、遺構の痕跡が認められるとしたならば、北側部分において周溝が検出される考算が高い。東と南部分については谷津へ向かう傾斜地に位置し、穿たれていない可能性もあり、仮に穿たれているとしても町道及び宅地となっている為、掘削され遺存していないと見られる。更に円墳と仮定した場合中心部は町道部分にあたり、この町道は第２図の明治14年迅速図に記載されている道で、近世には巡検道と呼ばれているなど早くから道としての機能を有していたと考えられ、作道時に埋葬施設をはじめとして古墳は大きく削平を受けたものと推測される。

２号墳については、１号墳と比較して遺存状態は良いものの、主体部が存在したと見られる場所は、養蚕に伴う室が構築されていた。従って掘削を受けている為、埋葬施設の残存は低いものと考えられる。周溝については、幅２m前後で巡るものと想定され、特に墳丘の南から東へかけての裾部には崩落による堆積が見てとれるものの、周溝は良好な状況で埋蔵されていると見られる。

両古墳の時期については、決定付ける遺物が出土しておらず断定できないが、僅かな調査範囲であった周溝内から埴輪片は全く発見されず、更に墳丘及びその周辺からも得られていない。おそらく埴輪を伴わなくなる時期、つまり６世紀後半の所産と推定される。古墳群全体の概要でも記したが、その立地条件と構成する古墳の規模から、古墳群内を１・２・８号墳と３・４・７号墳に大別することができ、両者の微妙な時間差を反映しているのかもしれない。

水神峯古墳

調査報告に至る経緯

水神峯古墳は、佐倉の山中坪集落北の台地で鳩崎小学校を見下ろす高台にあった古墳である。昭和48年8月、土砂採取中に丘陵の頂上付近で石棺を掘り当てたので、発掘調査を実施したものである。

石棺の中には1遺体と直刀・鉄鏃・刀子などの鉄器があり、軍事に関わる副葬品が目立った。また遺体頭部の棺の外に金銅張の馬鞍が副葬品として埋められていたのを発見した。さらに馬具の一種である杏葉が埋まっていた。杏葉は胸繋、尻繋などから垂下する扁平な装飾物をいう。古墳時代には鉄地金銅張の楕円形を呈するものが多く用いられた。杏葉の名は形が杏あるいは銀杏の葉に似ていることから生じたという。当時の豪族の盛装や黄金嗜好も窺われた。石棺は緑泥片岩で組まれ、その内部は朱で塗られていた。

この水神峯古墳群の位置は、霞ケ浦の入江を見下ろす交通、軍事の要所であり、農耕生産はもちろん水産、製塩等の取り仕切りにも最適な地であったろうと思われる。そういう霞ケ浦の入江の諸権利を掌中にして、大いに蓄財した豪族の墳墓であったと推測される。（文責　廣澤　登）

なお、上記の発見から出土遺物の所在が不明であったが、26年を経過した平成12年4月25日、旧公民館敷地内の役場倉庫の解体に伴う事前整理の時、その一部の所在が確認され今回の記録保存に結び付いた。

遺跡の立地

水神峯古墳は、霞ケ浦を臨む江戸崎町の北部、大字佐倉字水神峯2094－1に所在し、現在は失われている台地上に造られた墓跡である。遺跡の立地する台地は、谷津に囲まれた北東に向け樹枝状に延びる台地で、眼下に霞ケ浦に注ぎ込む小野川の河口が眺望される。姫宮古墳群とは南西に約1km、楯の台古墳群とは南に約1kmと僅かな距離を隔てる。

第8図　水神峯古墳位置図（1：25,000）

調査風景

石棺検出状況

←↑昭和48年8月、廣澤　登撮影

出土遺物

本項においては、水神峯古墳より出土した遺物を取り扱った。しかし、資料は散逸しているのが現状で、出土位置あるいは出土状況などの詳細な情報はない。従って、ここでは本遺跡より出土したとされる遺物の提示に主眼をおいて報告を行った。なお、金属製品については、予算上の制約によりX線の投射による実測図ではないことと、計測値については第3表に一括して掲載したことをお断りしておきたい。

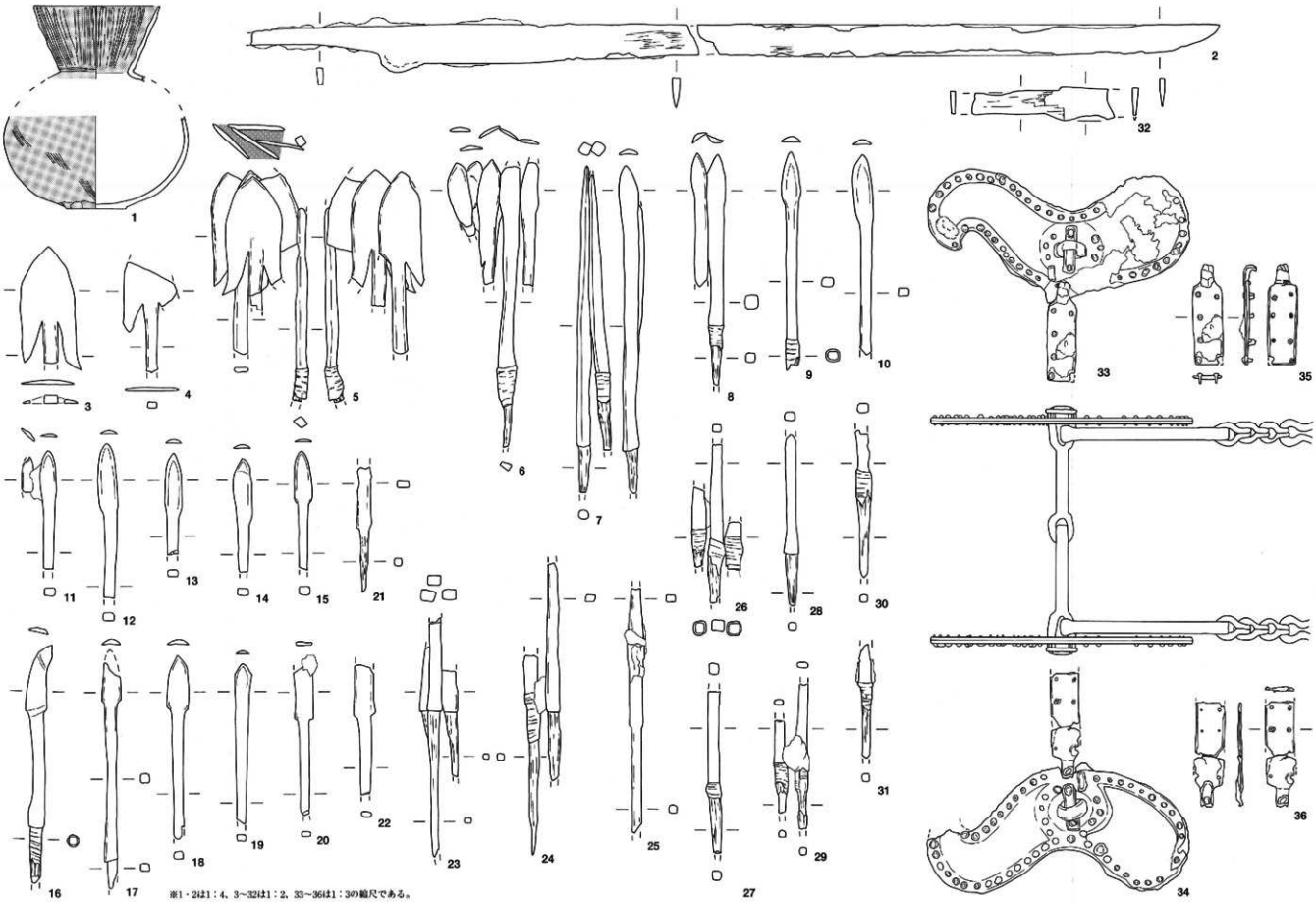
1は、土師器の埴形土器で、他の遺物よりも時期的にさかのぼるものである。器形は大振りで、口径13.4㎝、底径6.3㎝を計測し、胎土は石英・白色粒を含み、色調は赤褐色である。口縁部の内外面及び体部外面は縦位、頸部は横位の篦磨き、体部下端に篦削りを行い、外面と口縁部の内面に赤彩を施す。

2は、平造の直刀である。切先はふくら切先、関は片関で、刃関の状況は錆により不明となっている。茎部の先端は欠損しているが細くなると見られ、刃部には鞘の痕跡であろうか部分的に木質が付着する。

3～31は、鉄鏃で、紙面上の都合により掲載しなかった細片を合算すると、全体量は40～50本程と推測される。これらは、有茎平根鏃と有茎尖根鏃に大別され、それぞれ短頸鏃と長頸鏃とに分類される。3～5は、短頸の柳葉あるいは長三角形鏃と見られ、逆刺は先端で開く。5は4本以上の柳葉あるいは長三角形鏃と1本の長頸鏃が錆着しているもので、逆刺をはじめとする形状や計測値などほぼ同一である。長頸鏃については、鏃身部は欠損し、茎との境に口巻と見られるテープ状の有機質が認められる。6～14・19は、鏃身部が無関両刃の鏃で、それぞれ片丸造である。6は5本が錆着し、内4本が鏃身部のみで1本が茎部にかけて残存する。茎部との境には口巻が残り、関は台形関と見られ、茎部には木質が残る。7は2本が錆着し、1本に口巻が、残る1本に台形関が確認され、両者共に茎部には木質が認められる。8は鏃身部から頸部片と鏃身部から茎部片の2本で、茎部には口巻と木質が観察される。関は不明である。11～14はいずれも鏃身部片で、頸部の断面形状は矩形である。15～18は、鏃身部の関が撫角関の両刃片丸造の鏃である。16は茎部に矢柄の滑り留めに用いた太巻が残存し、関は台形あるいは直角関と判断される。17は鏃身部の先端を欠損しているが、関の形状は台形関の範疇に入ると見られる。20～22は、平根鏃の頸部から茎部へかけての破片で、関は現認状況では判然としないがそれぞれ直角関と見られる。断面形状はいずれも矩形である。23～31は、尖根長頸鏃の頸部から茎部へかけての破片である。25以外の茎部には木質が確認され、24・26・27・29・30・31には、口巻が残存する。関の状況については、遺存状況や口巻により断定できないものの、概ね台形あるいは直角関と判断される。

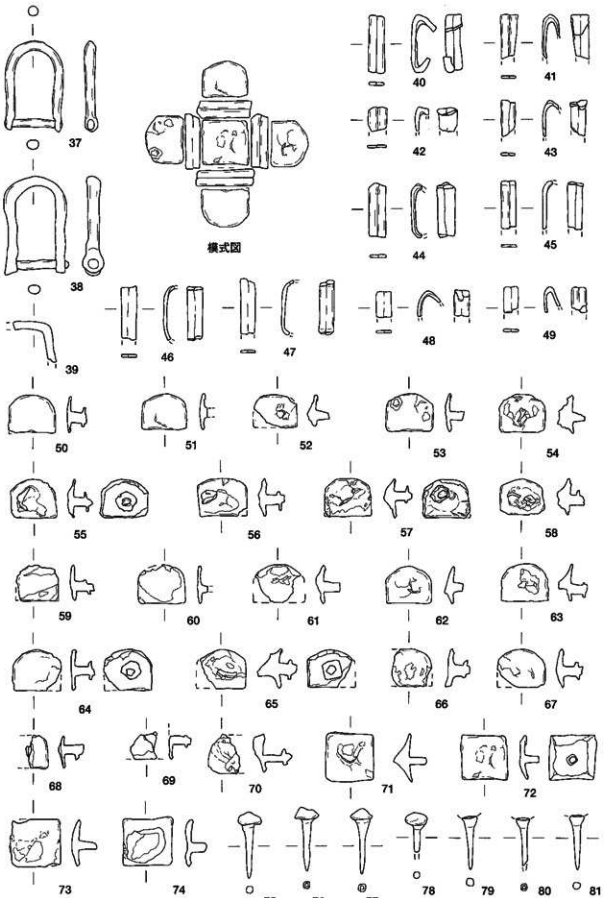
32は、刀子で刃部から茎部へかけての残片である。棟関及び刃関が確認され、茎部には木質が付着する。

33～81は馬具である。33・34は鉄地金銅張のf字形鏡板付轡で大型品である。鏡板の外周及び銜先環の回りには円形の縁金を巡らし、鉄地板に金銅板を被せる為の鋲留めを施す。鏡板の縁金と銜先環回りの縁金は独立せず接している。鋲留めは現認で33が45ヶ所、34が54ヶ所が確認され、理納時には1個体に付60ヶ所前後存在したと見られる。鏡板と銜は鏡板中央部の外側で鋲留めされた連結軸に銜先環を通す形で装着する。左右の銜は轡で連結し、鏡板の内側で引手と結合させ、引手と引手壺には3連と見られる兵庫鎖が確認される。35・36は鏡板に装着される鉄地金銅張の鉤金具で、鋲は2列8本である。37・38・39は鈴具で、39は方形気味の形状と推測される。40～74は、板状組合造止金具である。使用状況は模式図の通りで、全体で5個組以上の板状組合造止金具が存在したと見られる。40～49は、方形止金具と半円形止金具を連結させる鉄製の資金具で2本1組となる。50～70は鉄地銅張の半円形止金具で鋲留が確認され、鋲には方形状の裏留金具が残存する。71～74は板状組合造止金具の中心となる鉄地銅張の方形止金具で鋲留が確認される。75～81は半円球形の鋲頭を持つ鉄製の飾り鋲で、鋲足は拡大写真を掲載した通り板状の鉄板を巻いて作られている。



※1・2は1：4，3～32は1：2，33～36は1：3の縮尺である。

第9図　水神峯古墳出土遺物(1)



※37～74は1：2、75～81は原寸の縮尺である。

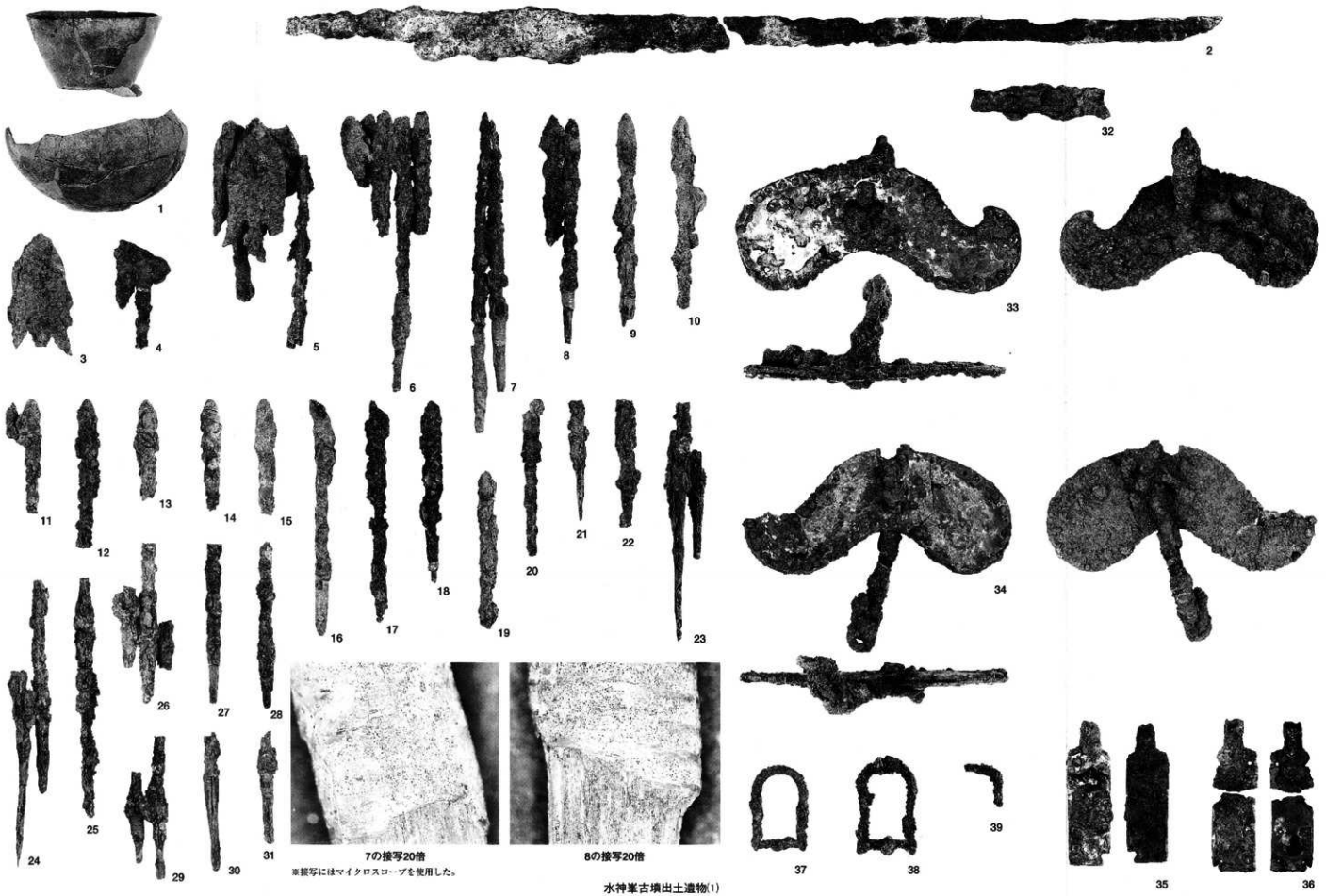
第10図　水神峯古墳出土遺物(2)

第3表　水神峯古墳出土金属製品計測表

番号	種類	計測値
2	直刀	全長<105>・刃部長91.5・幅4.2・厚さ0.9・重さ1400
3	鏃	鏃身部長6.6・幅2.8・厚さ0.2・重さ16.2
4	鏃	全長<59>・鏃身部長3.2・幅2.9・厚さ0.2・茎部長<3.2>・重さ7.5
5	鏃	被も遺存状態が良い遺物　全長<9.9>・鏃身部長<6.1>・幅2.9・厚さ0.2・茎部長<4.9>
6	鏃	最も遺存状態が良い遺物　全長<15.3>・鏃身部長<2.5>・幅1.1・厚さ0.2・頸部長8.5
7	鏃	遺存状態が良い遺物　全長<17.5>・鏃身部長2.5・幅1.5・厚さ0.3・茎部長12.9
8	鏃	遺存状態が良い遺物　全長<12.5>・鏃身部長2.8・幅1.5・厚さ0.3・頸部長6.4
9	鏃	全長<11.8>・鏃身部長2.8・幅1.1・厚さ0.3・頸部長7.5・重さ14.1
10	鏃	全長<10.8>・鏃身部長3.3・幅1.1・厚さ0.3・重さ14.9
11	鏃	遺存状態が良い遺物　全長<6.4>・鏃身部長2.6・幅0.9・厚さ0.2
12	鏃	全長<8.3>・鏃身部長3.8・幅1.0・厚さ0.2・重さ8.0
13	鏃	全長<5.5>・鏃身部長3.5・幅0.9・厚さ0.2・重さ7.9
14	鏃	全長<6.1>・鏃身部長3.5・幅1.0・厚さ0.2・重さ5.0
15	鏃	全長<6.4>・鏃身部長2.9・幅1.0・厚さ0.2・重さ6.6
16	鏃	全長<12.8>・鏃身部長3.7・幅1.0・厚さ0.3・頸部長6.2・重さ15.1
17	鏃	全長<12.1>・鏃身部長2.2・幅1.0・厚さ0.3・頸部長8.5・重さ14.2
18	鏃	全長<10.0>・鏃身部長3.0・幅1.2・厚さ0.2・重さ12.6
19	鏃	全長<8.6>・鏃身部長1.4・幅0.9・厚さ0.2・重さ9.5
20	鏃	全長<8.0>・幅1.0・厚さ0.2・頸部長<2.9>・重さ8.1
21	鏃	全長<6.8>・幅0.9・厚さ0.4・頸部長<3.3>・重さ4.8
22	鏃	全長<7.0>・幅1.2・厚さ0.3・頸部長<2.9>・重さ9.13
23	鏃	最も遺存状態が良い遺物　全長<13.0>・幅0.7・厚さ0.5・頸部長<5.5>
24	鏃	遺存状態が良い遺物　全長<15.6>・幅0.6・厚さ0.4・頸部長<8.0>
25	鏃	全長<13.1>・幅0.5・厚さ0.4・頸部長<7.5>・重さ17.7
26	鏃	被も遺存状態が良い遺物　全長<8.5>・幅0.5・厚さ0.4・頸部長<5.9>
27	鏃	全長<8.7>・幅0.6・厚さ0.5・頸部長<5.3>・重さ9.0
28	鏃	全長<9.2>・幅0.6・厚さ0.5・頸部長<6.3>・重さ9.3
29	鏃	遺存状態が良い遺物　全長<7.8>・幅0.5・厚さ0.3・頸部長<4.4>
30	鏃	全長<7.8>・幅0.6・厚さ0.5・頸部長<2.5>・重さ7.0
31	鏃	全長<6.1>・幅0.7・厚さ0.5・頸部長<2.3>・重さ5.8
32	刀子	全長<7.6>・刃部長<27>・幅1.7・厚さ0.3・重さ16.7
33	f字形鏡板付轡	縦10.4・横21.1・厚さ0.7・重さ385　銜長（柳まで）11.0・引手全長<135>
34	f字形鏡板付轡	縦10.4・横21.1・厚さ0.7・重さ330　銜長（柳まで）10.6
35	鉤金具	縦8.0・横2.4・厚さ0.4・鋲足長0.4・重さ17.1
36	鉤金具	縦<7.8>・横2.4・厚さ0.3・重さ13.9
37	鉸具	縦4.8・横3.1・厚さ0.6・重さ8.9
38	鉸具	縦5.2・横3.1・厚さ0.5・重さ12.2

番号	種類	計測値
39	鉸具	縦<2.1>・横2.3・厚さ0.4・重さ2.1
40	責金具	長さ3.0・幅0.8・厚さ0.2・重さ3.2
41	責金具	長さ<24>・幅1.0・厚さ0.2・重さ1.7
42	責金具	長さ<1.3>・幅1.0・厚さ0.2・重さ0.8
43	責金具	長さ<1.9>・幅0.8・厚さ0.2・重さ0.9
44	責金具	長さ<2.9>・幅0.9・厚さ0.2・重さ1.9
45	責金具	長さ<2.7>・幅0.8・厚さ0.1・重さ1.3
46	責金具	長さ<2.9>・幅0.8・厚さ0.1・重さ1.3
47	責金具	長さ3.0・幅0.8・厚さ0.1・重さ1.4
48	責金具	長さ<1.4>・幅0.8・厚さ0.1・重さ0.7
49	責金具	長さ<1.4>・幅0.8・厚さ0.1・重さ1.0
50	辻金具	長さ1.9・幅2.5・鋲足長0.8・重さ4.5
51	辻金具	長さ1.9・幅2.4・厚さ0.2・重さ5.2
52	辻金具	長さ1.7・幅2.3・鋲足長<0.7>・重さ2.5
53	辻金具	長さ2.0・幅2.5・鋲足長<0.8>・重さ5.8
54	辻金具	長さ2.0・幅2.4・鋲足長<0.6>・重さ6.5
55	辻金具	長さ2.0・幅2.4・鋲足長1.0・重さ7.1
56	辻金具	長さ2.0・幅2.7・鋲足長1.0・重さ7.5
57	辻金具	長さ2.0・幅2.6・鋲足長0.9・重さ5.3
58	辻金具	長さ1.9・幅2.4・鋲足長0.8・重さ4.4
59	辻金具	長さ1.9・幅2.3・鋲足長1.0・重さ1.8
60	辻金具	長さ2.0・幅2.5・厚さ0.2・重さ1.5
61	辻金具	長さ2.0・幅(2.5)・鋲足長<0.8>・重さ3.4
62	辻金具	長さ2.0・幅2.4・鋲足長<0.5>・重さ4.8
63	辻金具	長さ2.0・幅2.5・鋲足長0.8・重さ3.1
64	辻金具	長さ2.2・幅2.5・鋲足長1.0・重さ4.6
65	辻金具	長さ2.1・幅(2.5)・鋲足長1.0・重さ4.1
66	辻金具	長さ2.0・幅<2.1>・鋲足長0.8・重さ3.6
67	辻金具	長さ2.1・幅2.5・鋲足長1.0・重さ4.8
68	辻金具	長さ1.8・幅<1.0>・鋲足長1.0・重さ1.8
69	辻金具	長さ<1.3>・幅<1.2>・鋲足長1.0・重さ1.2
70	辻金具	長さ2.1・幅<1.6>・鋲足長1.4・重さ3.9
71	辻金具	長さ2.6・幅2.5・鋲足長0.8・重さ6.5
72	辻金具	長さ2.5・幅2.5・鋲足長0.7・重さ3.7
73	辻金具	長さ2.6・幅2.6・鋲足長1.0・重さ5.6
74	辻金具	長さ2.6・幅2.6・鋲足長1.8・重さ4.9
75	鋲	長さ1.8・頭部幅0.6・足部厚0.2・重さ0.3
76	鋲	長さ1.9・頭部幅0.6・足部厚0.2・重さ0.3
77	鋲	長さ1.8・頭部幅0.6・足部厚0.2・重さ0.4
78	鋲	長さ<1.8>・基部幅0.6・足部厚0.2・重さ0.3
79	鋲	長さ<1.4>・基部幅0.4・足部厚0.2・重さ0.2
80	鋲	長さ<1.2>・基部幅0.4・足部厚0.2・重さ0.1
81	鋲	長さ<1.4>・基部幅0.4・足部厚0.2・重さ0.2

※計測値の単位はcm・gで、<>は残存値、（ ）は復元値を示す。

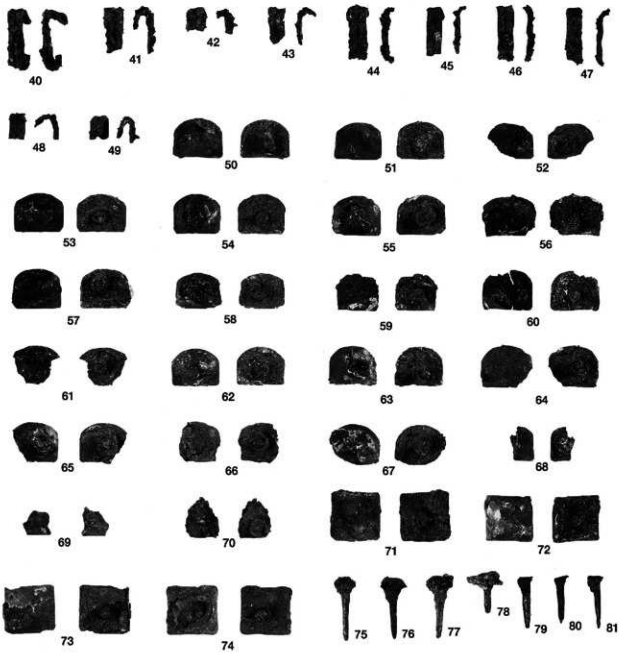


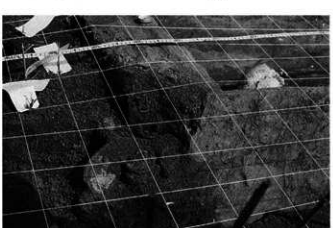
7の接写20倍

8の接写20倍

※接写にはマイクロスコープを使用した。

水神峯古墳出土遺物(1)





↑昭和48年8月、廣澤 登撮影

57接写20倍

76断面接写30倍

78断面接写30倍

遺物出土状況　※接写にはマイクロスコープを使用した。

水神峯古墳出土遺物(2)

おわりに

水神峯古墳は、昭和48年に緊急調査された遺跡である。残念ながら豊富な遺物を出土したにもかかわらず未報告のままであり、資料も散逸している状況にあった。今回出土品の一部が確認されたことに端を発して、資料提示に主眼をおく報告を行ったが、限られた資料や出土品からは次のことが明らかとなっている。

①古墳は台地上に築造され、墳形は不明であるが、埋葬施設は箱式石棺で内部には朱塗りが施されていた。

②出土遺物には、土師器の坩形土器・直刀・鉄鏃・刀子・馬具があり、馬具は稲敷郡において初見となっている。特にｆ字形鏡板付轡は、現在のところ茨城県内で管見に触れるものでは、木遺跡の他玉造町沖州に所在する前方後円墳の三昧塚古墳１ケ所となっている。

③古墳の築造時期は、出土している鉄鏃やｆ字形鏡板の形態から６世紀前半～中葉頃と推定される。

以上の情報を整理すると、水神峯古墳は、小野川が霞ケ浦に注ぎ込む河口付近を見下ろす台地上に築造され、信太郡の表玄関とも言うべき霞ケ浦の南西地から内浦までを視野に納める位置に存在する。また、この小野川は河川交通の要で、これを遡ると後の時代には信太郡衙の想定地があり、水利権を掌握するのに適した立地条件を示している。更に、本遺跡と僅かに500mの距離しか隔てていない池平遺跡の発掘調査においては、幅10m程の痩せ尾根上に通常の農耕主体の遺跡とは趣を異にした、あたかも弥生時代の高地性集落を連想させる、６世紀代に盛期を持った集落が確認されており、軍事的な要衝としての性格が指摘される。出土遺物やこれらのことを合わせ考え想像をたくましくすると、被葬者には、このような要衝の地を軍事力を背景として掌握した首長層の姿が浮び上がってくる。

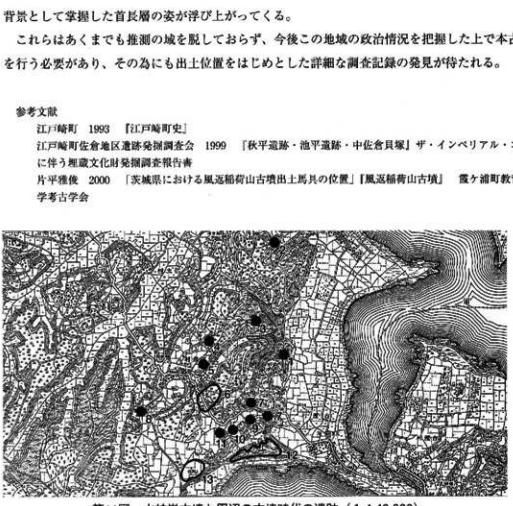
これらはあくまでも推測の域を脱しておらず、今後この地域の政治情況を把握した上で本古墳の位置付けを行う必要があり、その為にも出土位置をはじめとした詳細な調査記録の発見が待たれる。

参考文献

江戸崎町　1993　『江戸崎町史』

江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会　1999　『秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚』ザ・インペリアル・ゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

片平雅俊　2000　「茨城県における風返稲荷山古墳出土馬具の位置」『風返稲荷山古墳』　霞ケ浦町教育委員会　日本大学考古学会



第11図　水神峯古墳と周辺の古墳時代の遺跡（１：40,000）

抄　　録

フリガナ	ヒメミヤコフングン１・２ゴウフン　スイジンミネコフン
書　　名	姫宮古墳群１・２号墳　水神峯古墳
編著者名	間宮正光
編集機関	山武考古学研究所　〒286－0045　千葉県成田市並木町221　TEL0476－24－0536
発行機関	江戸崎町教育委員会　〒300－0504　茨城県稲敷郡江戸崎町大字江戸崎甲2148－2　TEL0298－92－4110
発行年月日	西暦２０００年１０月３日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
姫宮古墳群 １・２号墳	茨城県稲敷郡 江戸崎町大字 佐倉字遊坪 1801－2外	08440	町 50	35°58′ 39″9969	140°19′ 58″2125	20000712 ～ 20000804	80㎡	町道の拡幅 工事
水神峯古墳	茨城県稲敷郡 江戸崎町大字 佐倉字水神峯 2094－1	08440	町 67			197308		土砂採取

所収遺跡	種別	主な時代	検出した遺構	出土遺物	特記事項
姫宮古墳群 １・２号墳	古墳	古墳時代	周溝	縄文土器片 (早・前期) 土師器：甑 須恵器：甕	１号墳は円墳で、周溝を含む推定規模は20～25ｍ。２号墳は円墳で、周溝を含む推定規模は約23ｍである。両者の築造時期は６世紀後半以降と推測される。
水神峯古墳	古墳	古墳時代	埋葬施設	土師器：坩形土器 金属製品：直刀・鉄鏃・刀子・馬具（ｆ字形鏡板付轡・辻金具・鈴具・鈴）	昭和48年に緊急調査された遺跡である。墳形は不明であるが、埋葬施設は箱式石棺で、馬具は稲敷郡の初見となっている。築造の時期については６世紀前半～中葉頃と推測される。

姫宮古墳群１・２号墳
水神峯古墳

印刷　平成12年９月27日
発行　平成12年10月３日
編集　山武考古学研究所
発行　江戸崎町教育委員会
印刷　株式会社　文化総合企画